

史跡利神城跡のその後 — 保存と活用 —

佐用町教育長 浅野博之

はじめに

利神城跡は、平成二九年一〇月一三日に国の史跡に指定された山城と麓の御殿屋敷からなる城館遺跡で、佐用町では初めて国史跡になったものである。史跡面積は約八六万²mにおよぶ。指定にいたる経緯は紀要四号に掲載している^①ので詳細は省くが、長年の地元の熱意とご協力があつて広範なエリアが指定された。

町では早速、保存活用計画の策定に入り、令和元年度末には『史跡利神城跡保存活用計画』を刊行した。この計画書は将来にわたつて利神城跡を守つていくためのルールブックとなるもので、史跡の価値と構成要素を明確にするとともに課題を

洗い出し、保存管理・活用・整備等の方針を定めている。

通常であれば次は整備等に進むのであるが、利神城跡はこれまで全くの手つかずの城跡で、石垣の崩落、斜面の流失が思つていた以上に深刻で危険であることが明らかになった。

このため、まずはこれらの危険箇所に対して急的に保存対策を行うことが、短期的事業に位置付けられた。

本稿では、保存活用計画策定後の利神城跡の保存事業と活用事例を報告する。

一、保存—応急対策工事

利神城跡の石垣は一見すると良く残っているが、

その状態は必ずしも健全とは言えない。石垣の天端石はほとんどが欠落しているし、石積み自体がかなり変形し、いつ崩落してもおかしくない箇所が多数ある。既に崩落している箇所もあり、天守曲輪の石垣は平成に入ってから崩落し、石垣下の斜面の土が流失して根石から崩落が進んでいる。利神城跡の山城地区では、石垣下の平坦面（犬走り）がほとんど失われている場所もある。こうし

た斜面では近年豪雨化する天候に加え、鹿などの野生動物が増加し斜面を駆け上がることよつて、さらに土砂が流れていくという悪循環が発生していた。

そのため、対策工事としては斜面保護のため



山城地区での応急対策工事

の土のう積と石垣崩落を防ぐ金網設置を危険箇所に対して行ったことに加え、山城中心地区を囲む獣害防止柵（鹿柵）を設置した。

史跡では遺構を壊さないことが条件なので地面の掘削等を行わず、本格的な保存整備ができるまでの応急的な対策である。現状の地形や石積みはそのままに施工しなければならぬ点が、通常の土木工事とは勝手が違う。

工事期間は令和二年度から四年度までの三カ年で、文化庁の重要文化財等防災施設整備補助金を受けて実施している。補助事業費は総額約九四六〇万円である。

この工事により当面の史跡の保護が図られたと考へており、台風シーズンの大雨にも土砂が流れ出ることがなかった。また、後述する限定公開登山ができるようになった。

二、活用

保存活用計画において、活用は指定区域だけでなく今後保護を要する範囲（中世居館跡である別

所構地区) や関連遺跡地区(平福町並み地区・周辺地区)、さらには広域的な活用等まで項目をあげている。現在まで実施してきた主な活用例をあげておく。

(1) 限定公開登山

長らく登山禁止の措置を取っていた山城地区では、「いつ登れるようになるのか」「自己責任で登れるか」といった問い合わせが少なからずあったが、応急対策工事を始めたことによって場所を限って、ガイド同伴でのみ登山ができるようになった。

これには地元有志を中心とした「佐用山城ガイド協会」が立ち上げられたことが大きな力になっている。この会は令和二年度の終わりに結成され、令和三年度は三の丸まで、次の年には天守丸までのガイドをされている。登山客に良質なガイドを行うことは勿論、安全に配慮し事故のないようにしつつ、満足して帰ってもらえるようなガイドを目指しておられる²⁾。

公開エリアは、応急対策工事の進捗に合わせて一定の安全性が確保できた範囲であり、工事状況

を見てもらえる機会にもなった。初年度は三の丸から山頂を目の前にするも下山しなければならなかったが、やはり天守丸から眺める平福の町並みや周辺の山並みは登山した実感が大きく、満足される方が多いようである。

(2) 企画展示

令和二年には図書館の企画展示として「戦国佐用の山城」が開催された。二週間の展示であったが、町内に多く存在する山城跡のパネルと出土遺物の展示をして公開する機会となった。利神城跡だけでなく直近の発掘調査で堀跡が確認された福原城跡



企画展示「戦国 佐用の山城」

の成果も展示し、文化財係だけでは難しくなっていた展示が部署連携で行うことができた。

(3) 教育活動

未来を担う子供たちには、地域の歴史遺産を知ってもらうことが大切である。いまやそうした機会は家庭では少なく、学校で学習できることが重要になっている。小中学校では、まずは町内の歴史

遺産を教員が知るために、毎年教育研究所の講座で現地研修を行っている。どのような授業ができるかは教員の知識や意欲によつて差があり、より一層歴史遺産に対する理解を高める必要がある。



地域の方々と共に登山道の清掃作業

また、佐用高等学校では地域貢献事業として町内各所でボランティア作業をされているが、利神城跡においても、耕作放棄田の草刈り作業や登山道の清掃作業をされている。

校区再編により生徒の過半数が町外から通学しているのが現状で、そもそも佐用町内のこと知らない生徒がほとんどである。こうした活動は佐用町について知ってもらう機会にもなり、地域の方々と共に作業を行うことで高校の存在が大きなものとなっている。

(4) 未来伝承プロジェクト

利神城跡の国指定を機に佐用町では新たなプロジェクトを立ち上げている。^③

町内初の国指定史跡となったことで利神城跡は名実ともに町を代表する歴史的遺産となったが、町内にはほかに多くの遺跡や歴史的遺産がある。いずれも町の歴史や文化的な成り立ちを示すバツクボンとなるもので町の未来を考える上で欠かせないものである。

こうした様々な遺産を「守り、学び、活かし、

磨く」ことで、地域の誇りとしていこうという取組がこのプロジェクトである。行政が関わる主部署も、教育課だけでなく、生涯学習課、企画防災課、商工観光課などを想定し、全庁的に各種委員会や町民組織と協働で推進しようとするところに特徴がある。いわば町内の歴史遺産を総合的に保存・活用しようという取組である。

モデル事業の一つとして、平福の町家（空家）を活用した事業計画や活性化事業もワークショップ形式で進められ、令和三年には平福に一棟貸しの宿泊施設「NIIPPONIA平福宿場町」、レストラン「KUMOTSUKI」等がオープンした。プロジェクトは町全体の魅力向上や観光客の増

佐用の歴史と文化を磨く未来伝承プロジェクト



未来伝承プロジェクトの概要図

加、住みやすさ、住民の生きがいなどにつながり、地域の誇り、プライドを持って過疎の町が困難な社会を乗り切っていくことに目的がある。もちろん利神城跡の保存活用もこのプロジェクトとは無関係ではない。

三、保存と活用のこれから

町では、令和五年度から整備基本計画の策定に入る予定である。これは保存活用計画のルールに基づきながら、具体的な整備を進めるためのアクションプランであり、史跡の将来像を描くもので



町屋を活かした宿泊施設とレストラン

ある。一次計画としては一〇年間程度の事業計画で、史跡内の優先度に応じて立案することになる。史跡整備は長年にわたるため、二次、三次と計画を立てながら実施していくことになるであろう。ただし、史跡周辺では保存活用計画のルールに則って、観光をはじめ活用は多面的に行われることを期待したい。

おわりに

史跡指定を受けたものは、将来に向けて良好な状態で保存管理していくことが求められる。本町においても前記のごとくその努力と取組が続けている。

しかし、課題は多い。他の史跡指定地が指定までにある程度の整備や発掘調査が行われていることが多いが、利神城跡は手付かずの状態からのスタートである。

山城地区、山麓の御殿屋敷地区とも工事車両の進入が困難で、整備には遺構を壊さないという前提の中で、現実的にどのような技術工法があるの

か前例のない手法を検討することになる。さらにほとんどの土地は私有地で、公有化を図っていく必要もある。

そしてこれらを実現していくには相当の経費と、事業を進める人材が必要である。しかし史跡の保存管理に掛かるものは、自治体規模の大小とは比例しない。国や県に対しては、自治体の規模に応じた補助や支援を期待したい。

最後に、調査研究の面において、専門家の方々やひょうご歴史研究室の存在が大きな力になったことに感謝いたします。

- (1) 藤木透 「利神城跡の史跡指定とその活用」(兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室 『ひょうご歴史研究室紀要』 第四号、二〇一九年)
- (2) 西播磨県民局の「西播磨山城プロジェクト」が同時期に実施されたことも大きな力で、ガイド養成講座の開催や「西播磨の山城へG」「アプリと城跡の3DCGの作成、モニターツアーなどが実施され、山城ブームを牽引している。
- (3) 正式な名称は「佐用の歴史と文化を磨く未来伝承プロジェクト」という。過疎地ゆえの地域社会の空

洞化（人・土地・むらの空洞化）、そしてその基層にある町民がそこに住み続ける意味や誇りを喪失していく「誇りの空洞化」に対しての方策として提起された。関係人口、交流人口を増やし、仕事の創出につなげることが地方の不安解消、課題解決につながるとの考えである。